

αMプロジェクト2022

## 判断の尺度

Have something that defines my judgment

vol.1 高柳恵里 | 比較、区別、類似点

vol.1 Eri Takayanagi: Comparison, Distinction, Points of Similarity

ゲストキュレーター: 千葉真智子 (豊田市美術館学芸員)

Guest Curator: Machiko Chiba (Curator, Toyota Municipal Museum of Art)

2022年4月16日(土)～2022年6月10日(金) オープニングパーティ等はございません。

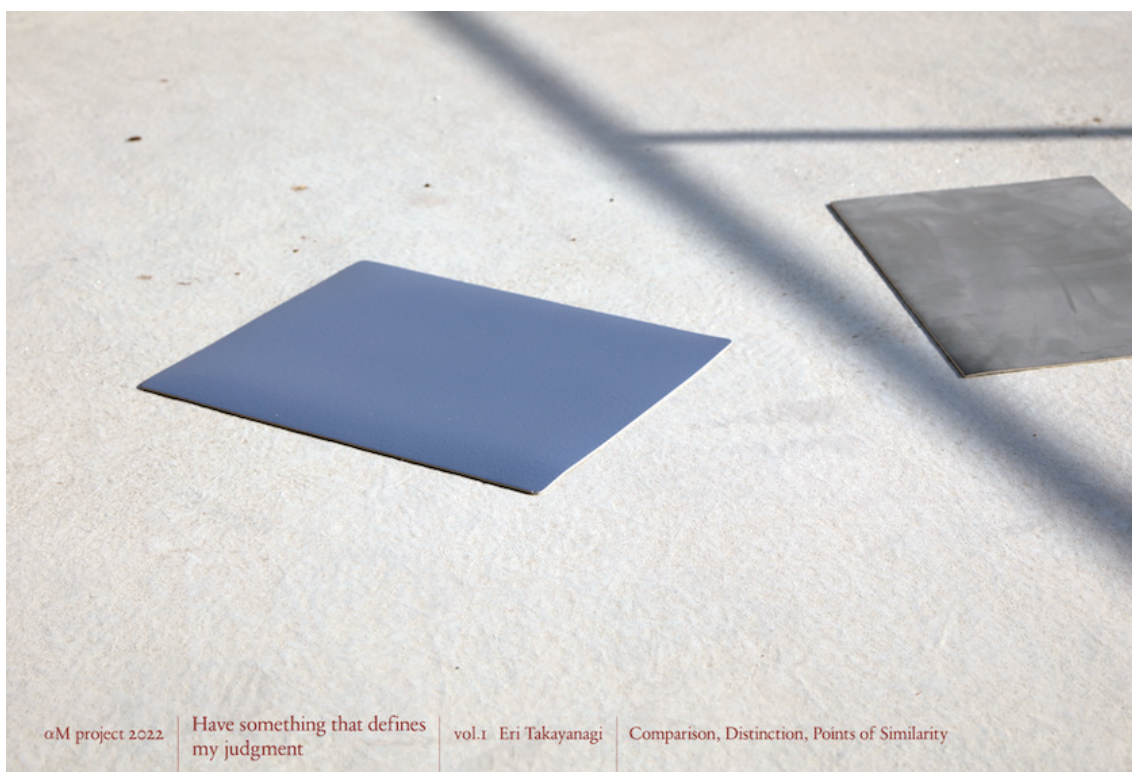
12:30～19:00※ 日月祝休 入場無料

会場: gallery αM

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11 アガタ竹澤ビルB1F

tel: 03-5829-9109 fax: 03-5829-9166

<https://gallery-alpha.com>



αM project 2022

Have something that defines  
my judgment

vol.1 Eri Takayanagi

Comparison, Distinction, Points of Similarity

※新型コロナウイルスの影響により、開催日時の変更や入場制限をする場合がございますので、お越しいただく際に Web サイト、SNS 等で最新情報をご確認いただきますようお願い申し上げます。またご来廊の際には必ずマスクをご着用いただき、ご連絡先の記入等へのご協力をお願いいたします。体調の優れない方はご来廊をお控えくださいますようお願い申し上げます。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム e-mail: [alpham@musabi.ac.jp](mailto:alpham@musabi.ac.jp) / tel: 03-5829-9109 / fax: 03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 社会連携チーム(ギャラリー不在時) tel: 042-342-7945 / fax: 042-342-6087

作家／の判断

高柳さんの作品は、態度なのだと思う。  
 そうしてみる。そうはしない。こうであってそうでないの問い続けてみる。  
 「ここにおいては何ごと、知っていることのようにやってはいけない、と思っている。」(個展ステートメント Gallery Jin Projects 2010年)

今回の企画の始まりにあったのは、正しい判断があるとしたら、それはどのようにあり得るのか、ということであった。本来、無数にあるはずの正しさに対して、私たちはどのように距離をとり、しかし、そのなかで、何かしらの判断をすれば、その根拠をどこに求めることができるだろうか。

アガンベンが『中味のない人間』のなかで最初に投げかけた問いは、作品の評価(美的判断)が作家の経験から奪われ、鑑賞者の立場からのみ検討されてきたことだった。  
 そこで改めて、作家による選択や判断という視点を導入してみる。とはいえ、作家による判断が、私たちに何らかの指標を提示してくれるとしたら、それはもはや作家の判断という領分を超えているのではないだろうか？

作家自身がそこに最終的に立ち上がったものに驚く。そこで生じた出来事に驚く。それをしたのは作家であるにもかかわらず。  
 世界を眺める尺度が一つ生まれる。

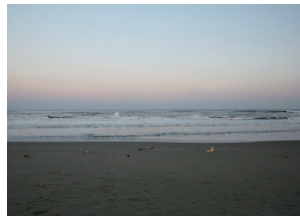
千葉真智子

●高柳恵里 (たかやなぎ・えり)

1962年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科修了。主な個展に「デモンストレーション」TALION GALLERY(東京、2021)、「それは、正確であるか」See Saw gallery + hibit(愛知、2019)、「性能、他」サイギャラリー(大阪、2019)、switch point(東京、2016)、「油断」上野の森美術館ギャラリー(東京、2014)、「不意打ち」TIME & STYLE MIDTOWN(東京、2013)、「近作展28 高柳恵里」国立国際美術館(大阪、2003)など。主なグループ展に「MOT コレクション つくる、つかう、つかまえる—いくつかの彫刻から」東京都現代美術館(2013)、「20世紀美術探検—アーティストたちの三つの冒険物語—」国立新美術館(東京、2007)、「心の在り処」(ブダペスト、モスクワ、2003)、「美術館を読み解く—表慶館と現代の美術」東京国立博物館(2001)、「MOT アニュアル 1999 ひそやかなラディカルズム」東京都現代美術館(1999)、「VOCA 展 1999」上野の森美術館(東京、1999)、「やわらかく重く—現代日本美術の場と空間」埼玉県立近代美術館(1995)、ライフギャラリー(アメリカ、1996)巡回、「彫刻の遠心力—この十年の展開」国立国際美術館(大阪、1992)など。



《実存》  
 2018年 | 毛布、アルミ複合板、板 | 11×73×53cm  
 撮影:木奥恵三 提供:TALION GALLERY



《2m(ルールとアバウト/K)》  
 2014年 | 発色現象方式印画 | 41.4×59cm



《レンガとブロック》  
 2019年 | レンガ、ブロック | 20×78×40cm

「判断の尺度」

千葉真智子 (豊田市美術館学芸員)

全ては平等に。その呼びかけは、平等であるために過度なまでの正しさを私たちに求める。しかし正しさとはそもそも何だろう。それはときに一つの原理へと向かい、小さな個別の差異を見えなくしてしまうだろう。いうまでもなく、平等であることは同じであることを意味しない。同じでないものを等しいというとき、私たちは尺度を一つにして、個々についてのそれぞれの評価や判断を手放さなければならないのだろうか。そうではなく正しさを超えて区別し、言葉を与えようとする。それには、私たちが手垢のついた言葉自体を作り直す必要がある。美術と呼ばれるものが少なくとも造形に関わる行為であるならば、その造形=言葉を練り、抛り所することで、尺度自体について問い、判断自体を創造的に作ることができるのではないだろうか。独りよがりになることなく、普遍的な外部をもつものとして。

私の判断が普遍性をもつかどうかは他者の判断に賭されている。私の判断を支えるものとして、私の外部を召喚すること。そこで想定されるのは、予め同じ尺度を持たないもの、置き換えできないものであり、その困難な対話が新たな言葉と批評を開く可能性の種となる。

1年の企画をとおして、それぞれの作家とともに判断の尺度について考えてみたい。これまでの尺度を手放して作り直す。この造形=言葉による判断は、世界を測る尺度となる。だからこの行為は、静かに深く政治的でもある。